

2017
おもろ
チャレンジ

世界遺産都市における町家の外観意匠調査

－震災復興と伝統意識の関係に着目して－

総合人間学部 4年

舟橋 知生

ネパール

2017年9月17日-

2017年10月17日



渡航概要と内容

<渡航概要>

2015年の震災から約2年半が経過した現在、世界遺産都市 Bhaktapur ではその復興においてどのような意匠が選択され、その経緯にはいかなる背景があるのか、特に昨年訪問時に顕著に見られた伝統的な意匠の取り入れと、地震の影響による被災地の人々の伝統意識の再燃との関係性について明らかにするべく、図1に示した地域で以下の調査を行いました。

- ① 震災後に建設された町家について調査シートを用いた外観意匠調査
- ② 意匠の選択理由や地震前後の家屋の意匠の違い等に関するヒアリング
- ③ 震災前に建設された町家の意匠の確認と建設年代に関するヒアリング
- ④ レンガ工場や修復現場の見学



震災後の新築（A地区）

No.	建物名	意匠	特徴	備考
1	1000	1000	1000	1000
2	1000	1000	1000	1000
3	1000	1000	1000	1000
4	1000	1000	1000	1000
5	1000	1000	1000	1000
6	1000	1000	1000	1000
7	1000	1000	1000	1000
8	1000	1000	1000	1000
9	1000	1000	1000	1000
10	1000	1000	1000	1000

外観意匠調査シート（一部）



Sunil さんとのヒアリング
風景



レンガ工場

また、滞在中お世話になった Kwopa Engineering College の Pant 先生のチームと、奈良女子大学のチーム合同の山岳都市の集落形成過程についての調査に参加させていただきました。こちらの調査では、Thini 村※において主に以下の4つを行いました。

- ① 屋根伏図、平面図、立面図、断面図の作成
- ② 家族構成、親族関係、室用途等に関するヒアリング
- ③ 水路、道路等インフラや公共施設のマッピング
- ④ 構造調査



村人へのヒアリング



屋根伏図作成

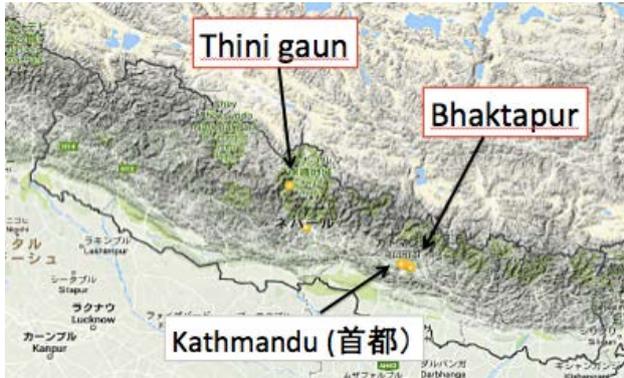


建物の実測



調査チーム集合写真

日程としては表1の通りです。



ネパール全体地図 (google より)

※Thini gaun : Musutang 群にある山岳都市、首都 Kathmandu から北東に約 350 km、バスで 24 時間。標高 2750m
200 世帯弱。主に農業 (蕎麦、リンゴ、野菜)。

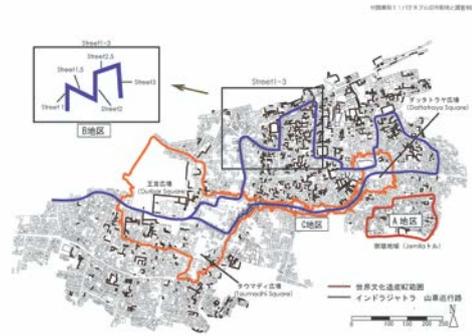


図1 Bhaktapur 旧市街地および調査地区

- A 地区 : 倒壊地域 (Jemla トル)
- B 地区 : 山車の巡航路沿いの一部
- C 地区 : 交易路沿いの一部

表1 : 日程

9月		デザイン(祭り期間)														10月															
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
移動	倒壊地域(B)	見学	山車巡行路(C)	(B)	(C)	移動	Mustang群 Thini村														移動	見学 (B) (C)	調整	移動							
外観意匠シート	①	外観意匠確認	ヒアリング	集落形成過程調査(屋根伏図、平面図、立面図、断面図等作成、家族構成等ヒアリング)														②	ヒアリング												

※ () 内のアルファベットは図1の範囲に一致

見学① : 修復現場見学 (@Kathmandu)、見学② : レンガ工場見学 (HIRA Bricks @ Bhaktapur)

<内容>

◎バクタプルにて

当初の予定ではA,B,C3つの地区の町家全軒を対象として外観意匠調査を行うことにしておりましたが、他地域での調査に加わることもあり、時間的な問題から対象地区を最も地震被害が大きかったA地区と古い町家が最も良く残っているB地区にしぼりました。A地区では、全218軒中震災後新築された47軒の外観意匠調査、うち44軒のヒアリングを行い、B地区では、全213軒中151軒の建設年代、38軒の意匠に関するヒアリングを行いました。Pant先生の学生のSunilさんに通訳をお願いし、調査を手伝っていただきました。また、昨年訪問時に知り合った建築家のRamさんにレンガ工場に連れて行っていただき、製作現場や倉庫を見学するとともに社長さんとお話をし、大量生産の契機やデザインの由来について後日改めてデータを共有していただけることになりました。

～苦労したこと、トラブルについて～

<苦労したこと>

計画通りの日程で調査を終えることが出来るのか不安で、何か予想外のことや急な予定が入った時の為に、朝6時に調査をスタートさせるなどして早め早めに進めていたのですが、体力的にも精神的にも辛くなってゆき、最終的には対象地区をしぼって期間中に終わられる軒数に集中す

ることにしました。お世話になっていた Pant 先生には「計画ばかりが先行しても調査は進まない、現地に行って臨機応変に調査を組み立てないと」と言われたのですが、なんとか頑張れば計画を完遂出来るのではないか？と思う自分がいてなかなか素直に助言を聞き入れることが出来ず、体力頼みでがつつ進めてしまい、結局は早めに切り替えておけばよかったと後悔しました。現地では急な訪問や見学が決まったり、ヒアリングが長引いたりといったことが多く、必要な時間を読むのに大変苦労しました。特にネパールの方々は「では明日」や「では今から行きませんか？」といった具合で急なスケジュールで動いていらっしゃるようで、わたしたちの普段の生活よりも計画や予定を立てるのが3~4割遅い印象を受けました。そのため、先方に合わせるばかりでは振り回されて身体1つでは足りなくなってしまい、本当に重要な約束はこちらからきっちり日時を指定して on time だ！ということをしっかり伝え、自分のペースを守ることも必要でした。日々新たな状況が生まれ、相手に合わせて動くべきか、他に自分がすべきことがあるのか常に選択に迫られ、臨機応変に的確な判断をする、ということには非常に苦労しました。自分はどのような目的で、何の為にその情報が欲しいのか、その情報はどういう意味で重要なのかということをしっかり相手に伝え、自分のスケジュールも伝えた上で相談すると、親身にはこの日のこの時間はどうか？と上手く予定を合わせるできるようになりました。わたしとしても最低限必要な計画と理想的な計画をあまり区別出来ていなかったことを非常に反省し、臨機応変な計画力、対応力が試された滞在であったように思います。

<トラブル>

昨年に引き続き2度目のネパール訪問であったこともあり、大きなトラブル等はありませんでしたが、昨年の経験を生かし特に気をつけたことについて記載します。

・むやみにニコニコしない

わたしは慣れない状況や人と話す時に雰囲気や和らげようとニコニコしてしまうところがあるのですが、昨年の訪問時に、知り合った人にしつこく誘われたり、何度も何度も声をかけられたり、色目を使われたり？と言ったことがあったので、今回は適切な態度をとるよう意識的に気をつけました。ヒアリング調査や、家に入れてもらって調査を行うこともあるので、住民の方々の良好な関係を築いておくことは調査を進める上で非常に大切ですが、だからといって誰でも彼でも良いように対応しては危険な目に遭いかねません。適度な距離を保ち、ドライに対応するところは自分を律してきっぱりと発言するように心がけ、「近寄り難い女性」を演じるよう心がけました。

◎ティニ村にて

渡航前に Pant 先生が Thini に調査に行かれることをお聞きしていたので、奈良女子大学の方々とも事前に打ち合わせをし、承諾をいただいた上で参加しました。Thini は建築学的な学術調査が入ったことのない村で、地図の作成と建造物の実測、ヒアリング等基本的な調査をされることでした。専門的な調査経験の少ないわたしにとって貴重な機会であるとともに、集落形成過程の調査という今後の研究に活かせるトピックであったため、マンパワーとして頑張るので

ぜひとも参加させてほしいとお願いをしました。Thini までは首都 Kathmandu からバスとジープを乗り継いで約 24 時間かかり、後半の 12 時間は遊園地のアトラクションに乗り続けているかのような悪路でした。また、Thini 村は標高 2750m ほどの高地で、正午を過ぎると毎日強風が吹き荒れるというかなり過酷な環境でした。滞在中は 4 チームに別れ、屋根伏図、平面図、立面図、断面図をそれぞれ担当し、強風の吹き荒れる午後に一軒一軒訪問してヒアリングを行いました。全軒の屋根伏図、特徴的な町家 6 軒の平面図、メインロードの立面図、メインロードと垂直方向の 1 本の通りの断面図を作成し、それらに含まれる世帯の家族構成や親族関係に関するヒアリング、構造の調査を行いました。私は基本的に屋根伏図作成を行いました。

～苦勞したこと、トラブルについて～

<苦勞したこと>

私以外のメンバーの方々は皆さん建築がご専門で、総合人間学部で環境構成論を専攻しているわたしにとって技術的に圧倒されることが多く、屋根伏図作成においても線 1 本描くのに非常に神経を使いました。また打ち合わせや議論、実測等様々な場面で、「それは文系的な考え方ですね」「文系の人はいそいそします」「文系と理系ではここで差がでます」と言われたり自分でも実感したりすることが多く、文系、理系の枠にはまらずに研究を進めてきたつもりだった自分の立ち位置がよくわからなくなりました。「私のやり方」を確立させたいという思いを持ち、Bhaktapur での調査の前半を経て、少しは「私のやり方」が見えてきたかな、と思っていたのですが、合同チームの専門的な調査に参加して、様々な調査方法、考え方、姿勢があることを目の当たりにし、まだまだ私の知見は狭く世間に通用するものではないと反省しました。合同チームの調査では、自分だけが臨機応変に動いたとしても意味がなく、全体の中で自分の立ち位置をしっかりと把握し、次にチームはどう動くのかまわりの段取りを読み取って、自分が今すべきこと、今後の動きを考えなければならないところに単独調査にはない難しさを感じました。

<トラブル>

Kathmandu に帰るバスに乗る際、ネパールの皆さんがホテルの前にバスが来ると仰っていたのでずっと待っていると、時間を過ぎてもバスが来ず、慌ててバス停に駆けつけると予約したバスは満員になっており、結局次のバスに乗せられることになってしまった、ということがありました。Over booking は常、予約していても席は取られる、ということが当たり前らしく、必ず自分でバスがどこから出発するのか、自分の席はどこなのか、を確認すべきだったのですが、みんなそう言っているからそうなのでしょうと思い安心してしまっていたことが原因であったと思います。次のバスには 30 分もせず乗れ、交渉して席も取れ、結果的には大きな問題ではなかったのですが、いくら信用できる人であっても、信頼しきってはいけなし、必ず自分で確認する、交渉する、ということをお忘れてはいけなしと教訓を得ました。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

先述したとおり、今回の渡航では、Bhaktapur での単独調査と Thini での合同調査の2つの調査を経験しました。今回の一番の渡航目的である Bhaktapur での調査を通して感じたこと・学んだこと、2つの調査を通して感じたこと・学んだことの2つに分けて記したいと思います。

(1) Bhaktapur での調査を通して感じたこと・学んだこと

今回の目的であった震災後の新築町家の伝統的な意匠の取り入れと、地震の影響による被災地の人々の伝統意識の再燃との関係について調査を通して明らかになったことは、これらには直接的な関係性は殆どないという結果です。ごく稀に「地震や災難にたいする魔除け的な意味を込めて意匠を取り入れた」という家主の方がいらっしゃいましたが、大多数は「政府が勧めている意匠だから。この意匠の意味は全く知らない」との解答でした。また、伝統意匠を取り入れていない町家もこの1年間で非常に増えており、経済的な理由を挙げていました。1年前の訪問時に私が予想したほど美しい結果は得られず、「政府の言う通りにした」「経済的な理由で」といった「オモロくない」結果となってしまいました。しかし、この結果を通して、政府の影響と震災による経済的な負担が予想以上に大きいということに気づかされ、一見伝統意匠を用いているけれどよく見ると間違った使用をしていることなども多数発見され、伝統的な意味合いを持った意匠が単なるファッションとしての意匠へと変わってきてしまっていると感じました。世界遺産都市としてこの現象を捉えると、非常に危うい状況だと考えられ、今後「伝統のファッション化」といった側面から Bhaktapur のまちを見直してみたいと考えています。



伝統意匠を使わない
シンプルな町家



ファッション化した伝統意匠



伝統に沿った意匠

(2) 2つの調査を通して感じたこと・学んだこと

都市部の Bhaktapur と山間農村部の Thini では「外国人であるわたし」に対する態度が全く違い、住民の方々との打ち解け方も大きく違ったことが非常に印象的でした。Bhaktapur では調査地図を持って歩いているだけでも地元の方が興味津々で近寄ってきて、自分の家はここだから入れとか、ご飯はたべたのかと食べ物を与えるなど積極的にコミュニケーションを取ってくれまし

た。世界遺産都市であることから日常的に外国人観光客を目にしている、ということが大きいかと思いますが、Sunil さんの話によると、震災の後に海外から復興ボランティアが多く来て、外国人に優しくすると何か自分の家に良いことがあるかもしれないと思っている人も多いそうです。一方で Thini では、地元の方々に調査を始める前にご挨拶と説明を行ったのですが、我々のことを気にしながらもいつも遠巻きでみていると言った様子で、なかなか打ち解けることが出来ませんでした。到着して3日目に村で結婚式があり、その宴会では村全員で踊るのですが、(小さな村の為、村の全員が親戚関係にあたる)その宴会に参加し、また少しずつネパール語で一言二言会話が出来るようになってから急激に住民の方々との距離が縮まったように思います。ダンスはコミュニケーションであるということと、現地の言葉を話す重要性を改めて強く感じました。ヒンドゥー教徒が大多数を占める Bhaktapur とチベット仏教徒が大多数を占める Thini、都市部と山間農村部、宗教も地理的環境も生活スタイルも全く異なる2つのまちで生活をし、居住環境の違いがこんなにもヒューマニティーの違いを生じさせるのかと非常に勉強になりました。また、先述したとおり、単独調査と合同調査の違いや、現地の人に従うべきか、自分の判断を優先させるべきかといった海外での過ごし方についても非常に多くのことを学びました。

～Bhaktapur にて～



調査風景



ヒアリング中



家に入れてくれたアマ (お母さん)

～Thini にて～



挨拶、説明会



結婚式宴会



お祭りのティカをつけてもらう

～その他～



Pant 先生、奈良女子大学の学生と調査の打ち合わせ



JICA 修復現場見学（カトマンズ）



奈良女子大学の学生と Thini に関する勉強会

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回 1 ヶ月間ネパールに滞在し、最も難しいと感じたことは馴染みの浅い地域で学術調査をする、ということです。単なる旅行であれば、面白いと思うこと、楽しいと思うことに目を向けてそれを好きなだけ楽しめば良いですが、調査となると立ち入りたくない場所、気まずい状況、失敗など好ましくない状況に陥ることは避けられないと思います。特に馴染みが浅ければ浅いほど、自分の持っている知識と実状の違いから適切な判断が出来ず、トラブルを起こしやすくなると思います。今回の経験を経て、自分の知識と実状の違いをどうカバーするか、ということ学ぶことが出来たと思っております。それは、次の3つのことだと思っています。まず第一に、いくら知識を詰め込んでも、現地で生活している人には到底及ばないのだから、本当に知っておくべきことは何か、情報の取捨選択をすること。そして次に、現地に行って柔軟な対応が出来るよう、必ず行すべきことを数個にしぼり、優先順位をつけること。最後に、面白いと思うことに対して、すぐに飛びつかずに一歩引いて大きな枠の中で考え、どういう位置づけが出来るか、どんな可能性があるか、また引き際はいつか、ということ客観的に考えてから行動するということです。私は今後大学院に進学し、文化財建造物の保存における木材利用の持続性について、木材生産の側からの研究を行う予定です。院での研究では、山村や森林に入っのフィールド調査を行いたいと考えており、人や建物だけでなく、自然も調査対象になります。自然を相手にするということは今回以上に知識と実状の差や予想外の出来事に悩まされる、ということだと思っておりますが、今回の経験から得た教訓を生かし、まだまだ模索中の「私のやり方」を完成させたいと考えております。

今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

オモロいことほど飛びつきやすく、失敗しやすい。これがおもしろチャレンジを通して得た教訓です。良くも悪くもこれまでの人生であまり失敗をしてこなかった京大生にとって、こんなに心踊らされ、失意の底をみて、苦戦する経験は大変貴重なものだと思います。ぜひチャレンジしてみたいです。

■ 主な奨学金の使途

*滞在費

*渡航費

*現地交通費

*ビザ・海外旅行保険

*謝金

*雑費 など